

# 公園・広場の利用・管理・運営や居場所づくりのための検討プロセスとその成果の展望

—小さいことから始めて協働の輪を広げ大きなアクションへと移行する漸進的プロセス

永橋爲介（立命館大学 教授／環境デザイン学）

## はじめに

本稿では、昨年度からこれまでに4回実施されている「あいりん地域まちづくり会議公園検討会議」（以下、公園検討会議）での議論と、平成29年度『西成区における今後のまちづくりの方向に関する検討調査業務報告書』（有限会社ケース、平成30年3月）<sup>1</sup>におけるアンケート調査（以下、アンケート調査）を基に、“「居場所」づくりと「つながり」づくりのためのプロセスの重要性とその成果の展望”という観点から『2018～2022 西成特区構想の推進に向けた有識者提言書』（以下、提言書）の補足説明を行うものである。あいりん地域における今後の公園や広場の利用・管理・運営に関するプロセスやその成果の展望を記述し、同地域における今後の活動と予見されるその成果が、西成区全体の公園や広場等、都市オープンスペースの利用・管理・運営ならびに居場所づくり、地域づくりにどう展開し、寄与し得るかについての考察を試みたい。

## 1. 公園検討会議での議論とアンケート調査結果に見る公園や広場の利用・管理・運営に関する意見

公園検討会議はこれまで4回の議論を重ねてきた。あいりん地域や西成区における公園の利用・管理・運営については、野宿生活者の起居を巡ってさまざまな対立や衝突が繰り返され、その都度、葛藤に満ちた様々な試みと尽力が行政公園管理者、地域住民、支援団体によって鋭意なされてきた。そうした苦難や葛藤の歴史と経験を踏まえ、公園検討会議では「まずは各委員が地区内の公園や広場について抱いている様々な思いを見える化する」作業を行った。またアンケート調査でも、公園に対する思いや要望を「大人の目」と「子どもの目」から結果報告がなされている。

「見える化」作業では、地区内の花園公園、仏現寺公園、萩之茶屋中公園、萩之茶屋南公園、そして旧萩之茶屋小学校内にあった「萩の森」、さらには「公園のあり方全般」に関して合計200前後の意見が提起された。議論の方向性を見定めるべく「まずは議論を深めていきたい課題」の投票を行い、その結果、関心が集まる3つの優先検討課題が明らかになった。

一番の関心事は「地域みんなが使える公園にしたい」という意見である。アンケート調査でも公園に関して一番多かった「大人からの意見」は「みんなが気持ちよく使える環境や工夫を検討して欲しい」というものであり、「子ども意見」としては「もっと自由に遊びたい」という声が最も多く上げられている。一方、アンケート調査では子どもたちの声として「公園で生活する人のことも考えてほしい」という声が半数上がっており、「地域の公園をいかにしていろいろな人々が気持ちよく使えるか？」ということが子どもにとってもまた大人にとっても最重要検討課題であることが確認できる。

公園検討会議における2つ目の関心事は、旧萩之茶屋小学校にあった「萩の森」に替わる

<sup>1</sup> 巻末資料参照

「新・萩の森」の創生についてである。「子どもが育つ空間として萩の森が有していた火（ひ）、水（みず）、木（き）、土（つち）が使える素敵な森はやはり必要」、「緑が極めて少ないあいりん地域や西成区にとって、子どもたちが使える森の存在は子どもたちや子育て世帯を呼び寄せる新しい地域の魅力になるのでは」という意見への共感、賛同が示されている。アンケート調査結果においても「泥んこ遊びや木登りをしたい」「一緒に遊んでくれる大人がいてほしい」等、萩の森が果たした役割やプレーリーダーが居るプレーパーク的な場所への希求が子どもたちから強く示されている。

公園検討会議においては「誰もが気持ちよく使えるきれいなトイレ」が第3の関心事として挙げられた。車椅子も入れるトイレ、子どもも女性も安心して使えるトイレ、地域内外の人々が気持ちよく使えるトイレ、そして災害時に避難場所となる公園のトイレやトイレに付随する水設備に対する切実な関心が寄せられている。公園検討会議での議論とアンケート調査結果から示された関心事や検討課題は今回の提言にどう位置づけられているだろうか？以下、概観していく。

## 2. 提言書における「公園・広場の管理・運営・利用」や「居場所づくり」の位置づけ

「公園・広場の管理・運営・利用」や「居場所づくり」に関する関心事や検討課題は、提言書では「提言2、3、4、5」に関連する。

【提言2】居場所づくりを通じてまちをシェアするコレクティブタウンを目指す

【提言3】地域に子どもの声が広がる子育て・子育てしやすいミックスコミュニティを推進する

【提言4】優しい！おもしろい！大阪らしいまちでイメージアップ（アーカイブ＋アクティブラーニング）

【提言5】連動する地域ボトムアップと具現化のための行政局間連携（横串化）による協働システムを構築する

提言2では「まちにあるヒト・モノ・コト（社会資源）をつなぎ合わせながら様々な「居場所」をつくるプロセス」が「出会いと出番・役割」と生み出す、と提起されている。また、プロセスが生起した「出会いと出番・役割」が、各々の特長を生かしながら街をシェアして紡ぐ「コレクティブタウン」を具現化するとともに記されている。左記の「居場所」の中に地域内の公園や広場はもちろん含まれるし、ここで示されているプロセス、またそのプロセスが生起した「出会いと出番・役割」こそが公園・広場の利用・管理・運営のあり方を具現化し、活気あるコレクティブタウンの具現化に寄与し得るとも言える。公園・広場の利用・管理・運営の検討は、コレクティブタウン実現のための試金石の1つとなることを押さえておきたい。

提言3に関しては、「地域 みんなが使える公園・広場」、「みんなが気持ちよく使える環境や工夫がなされている公園・広場」、「子どもたちが火（ひ）、水（みず）、木（き）、土（つち）に親しみ、泥んこ遊びや木登りに興じて歓声が響き渡る公園・広場」、「公園に付随する誰もが気持ちよく使えるトイレ」の実現と実現に向けてのプロセスの始動がその具現化に寄与することは明らかである。

提言4に関しては、そうした公園・広場の実現に向けて、子どもたちが地域の大人（地域住民、労働者、行政関係者）と共に何らかのアクションを展開することがその具現化として相応しく、地域内の信頼関係やお互いがお互いを思いやり慮る風土をさらに醸成、成熟させることに寄与する

内容となっている（その結果、まちに対するイメージもアップするだろう）。

提言 5 は、上記提言 2, 3, 4 に資する「公園・広場の利用・管理・運営」を実現、具現化する上で不可欠なインフラと言えるだろう。公園管理に関与する部局（建設局、公園管理事務所）のみならず、区役所、公衆トイレを管轄する環境局、子どもたちの学びを促進する各小中学校はじめ教育委員会の連携ならびに協働システムの構築は必須のものとなる。

### 3. 公園検討会議、アンケート調査そして提言書を踏まえた今後のプロセスと展望について

あいりん地域における公園・広場をどうしたら「地域のみんなが使える公園」にできるのだろうか？地域住民にとっての居場所、子どもたちにとっての居場所や遊び場、子育ての場としての居場所、野宿を余儀なくされる人たちの居場所、労働センターに集う労働者達の居場所、そして地域外の人々（例えば海外からの観光客）にとっての居場所という多くの役割を公園・広場の中でどう共立させ折り合いを付けるか？これは、日本国内、いや海外を探してもここ以外にはあり得ない都市オープンスペースの利用・管理・運営に関する最難関の課題だと言える。その困難さは、例えば第 4 回公園検討会議（2018 年 8 月 2 日実施）でも以下の市民委員の発言に垣間見ることができる。

（引用者註：アンケート調査の設問項目にある）誰もが使える公園にすべきというのは公園によって色んな使い方をすればよいという設問になってるわけだけれども、当然公園とは誰もが使えるべきであってね、その中で言う公園によって色んな機能で使い分けをすればよいという話にイエスと言ったら、ある人にとっては必要のない公園だとなるわけですね。公園の機能を固定化しようと僕は取ったんで、そうすれば誰もが使える公園じゃないわけだね、そここのところの判断も出てくるんじゃないかと思います。

誰もが使える公園であるべきなのか、目的を持った公園であるべきなのか、一般論からすると、誰もが使える公園であるべきだけど、この辺の特殊事情を見ると、誰もが使える状況を作ったことが、なかなか使いにくい公園になったというのが結論だったということで、今言える事です。誰もが使える前提にしたときに誰かしか使わない公園になる可能性が強いというのが、あいりんの状況だと結論付けられると思います。（発言ママ）

この難問に対しては一方で、「野宿をしなくてもよいサポートが必要」、「使い分け、利用時間を工夫すべき」というアイデアへの支持もアンケート調査結果から読み取れる。また第 3 回公園検討会議（2018 年 6 月 14 日実施）においても「（引用者註：萩之茶屋中公園の今後に対して）子ども達も気軽に利用できたらとか、朝はゲートボール、昼は炊き出し、その後は子どもたち、夕方、炊き出しをするというシェアしながら使える公園。かつては、わかき保育園が青空保育をしていたように、地域のみんなが利用できるようにしてほしい。公園の倉庫に、動物小屋もあるけれど、それを追い出すのではなく子どもたちが面倒見られるようにしたらいいとか、今ある状況と子どもたちの活動を共存させるための議論への関心が高い」ことが示され、さらに「（引用者註：子どもたちは四角公園のおっちゃん達と）共存したいんですよ。今はちゃんとした共存ではなく、お互い気を使っているような。もっと言えば、子どもたちは時間を決めたらいいって言っています。朝は、保育園の子どもたち、炊き出しするときはもちろん炊き出しの人で使いたらいいいし、特に放課後は子どもたちが使いたい。そのときは犬は繋いでもらい、おっちゃんもボールが来ても文句は言わない、そ

ういう風なことです」という子どもたちの声が紹介されたりしている。

しかしながら、厳しく言えば、上記はまだ「子どもたちにとっての居場所や遊び場」と「野宿を余儀なくされる人たちの居場所」そして「労働センターに集う労働者達の居場所」における「折り合い」に対するアイデアに止まっている。この「折り合い」を実現するだけでも容易なことではないのに、他のステークホルダー（地域住民、子育て世帯、地域外の人々）との「折り合い」をデザインすることはさらに容易ではない。この難問を解く鍵はどこにあるのか？

難問を解く鍵は、実は公園検討会議での議論と市民委員の発言にそのヒントを見いだすことができる。それは、「誰もが使いやすいトイレ」実現へのチャレンジである。公園検討会議において第3の関心事としてあげられた「誰もが気持ちよく使えるきれいなトイレ」への取り組みは、「誰もが使える公園や広場」を実現する「折り合いのデザイン」を検討する助走として有効ではないだろうか？その理由を以下3つ述べる。

まず「トイレをきれいにすることに対して反対する人はおそらく誰もいない」という点である。公園や広場のあり方については、例えば長らく放置されている小屋の撤去についてもその可否についての意見が定まらず、慎重な検討と丁寧な対応が今後も必要である。しかし、公園に敷設するトイレや水回り設備の改修については合意が取れやすい。ただし、今の状況でトイレや水回り設備を改修だけにしても、その使い方や管理の仕方ではいろいろな問題がその後出てくることは必須である。まずは、現在のトイレの状況を確認し、「協働作業の練習や信頼関係づくり共同作業の場」として、既存のトイレを清掃するプロジェクトを行政関係機関（公園、環境、区役所）と子どもたち、地域住民、労働者ならびに支援団体と一緒に進めることを検討したい。第4回公園検討会議でも市民委員から次のような発言があり、公園をきれいにし皆で使える状況を作り出すことが、「誰もが使える公園づくり」の基盤づくりに寄与するという示唆がなされている。

トイレで言えば、子ども達が利用できるトイレというのができると、子育て世帯が使いやすいと思います。先程の誰もが使える公園であれば良いのになというのは、自分の使いたい、相手の使いたいを阻害する場合みたいなところが、お互いが相手のことを思いやれるような、折り合いをつけられるような場所になれば良いのになと、そこをどういう風にしていこうというのがテーマかと思います。

次に、子どもと大人が協力してのトイレ清掃活動の実施は、その成果と手応えがすぐに感じられることにその利点がある。また清掃活動の中で、「このトイレ、もっとこんなふうになったらいいのにな！」「こんなふうになったらもっと使いやすくなるのにな！」というトイレ改修への思いやアイデアも得られるだろう。お互いが協力して活動する中でこそ、互いの共通理解と他者への尊敬、そして自分が地域を良くしていることに貢献できているという達成感や自己肯定感を子どもも大人も双方得ることができるのではないかな。この「自分達のまちは自分達で良くすることができる」という経験は、それを経験した当事者達は自ら手放そうとしないものだ。この経験が次の行動（トイレの改修や公園・広場の「折り合いのデザイン」へのチャレンジ）の基盤となり駆動力になると期待できる。

子どもと大人が一緒になっての「トイレの清掃活動」という「小さな行為」は、もう1つ「地域への愛着づくり」にも寄与する可能性がある。アンケート調査結果をみると、子どもたちのまちに対する印象は小学校3年生までは「たのしい」「やさしい」「あかるい」「おもしろい」が主たるものになるが、

4年生から高学年になればなるほどまちに対する印象として「くさい」が増えてくる。これに関連して「道路のしょんべん臭さがなくなるように」「トイレがきれいな方が良い」という子どもたちも意見も多い。ここで注意すべきは、この「くさい」という印象や評価が極めて両義的な意味を持つということである。

例えば「こどもの里」の子どもたちは、キャンプで自然豊かな場所で思いっきり遊んで同所に戻ってくるとき、「くさいところに帰らなアカンから嫌やなあ」と叫びつつも、「この匂いかぐと帰ってきたなあって気持ちになるな」とほっとした表情で語る子もいるという。また町内会の役員さん達からも「どこかいいところに町内会の旅行とかで行くんやけど、こっちに帰ってきてこの匂いかぐと、ああ自分の街に帰ってきたなあってしみじみ思う」という声を聞いた。臭いことには閉口しつつ、「困ったなあ。嫌だなあ」と思いつつも、しかしそこに「自分の街」、「自分が住んできた街やこれから住み続ける街」に対する愛着や郷愁がそこはかたなく感じられる。この両義的な思いを共通のものとして、「くささに懐かしさや郷愁を感じる時も実はたまにあるけれども、少しきれいにしてみたらどんな気持ちになるか？」という社会実験として「試しに、子どもたち一緒にトイレからきれいにしてみようか？」という活動の意義を公園検討会議で協議する価値はあると考えている<sup>2</sup>。

子どもを「ご縁」にして行政、市民、労働者、事業者が公園に付設するトイレの清掃や改修を共同で進めていくことができれば、さらに大きな課題、すなわち「誰もが使える公園・広場づくり」にチャレンジする基礎体力が涵養されるのではないだろうか？トイレの清掃や改修に子どもたちがその熱意と誠意をもって勤しむ姿に接することで、大人が学ぶこともたくさんあるだろう。その逆もまたしかりである<sup>3</sup>。そうした相互理解や相互の学び合いを通して、子どもたちが望む「自由に遊べる場所」、そして旧萩之茶屋小学校内に存在した「萩の森」に替わる「子どもが育つ空間として萩の森が有していた火（ひ）、水（みず）、木（き）、土（つち）が使える素敵な森」づくりに対する共感や賛同が広がり、「いっちょ一肌脱ぐか！」と意気に感じる人々も増えるのではないか。

公園・広場の利用・管理・運営は、あいりん地域そして西成区だけでなくどの地域においても問題を抱えている。少子高齢化に伴う利用者の減少、公園愛護会を担う人々の高齢化と減少などにより、特に大きな問題は無くとも荒れ果て放置された状態となっており、そうした状態に対する無関心も増大しているところは少なくない。そのような状況下で、行政管理者にとってもその管理運営を恒常的に担うことは財政的にもまた意義からしてもその効用が見えにくいものとなっている。そうした中、最難関の問題が顕在化し、いろいろな立場の関係者から注視されるあいりん地域の公園・広場において「誰もが気持ちよく使える公園」づくりのプロセスが小さなところから小さなステップを刻んで漸進的にスタートすることは国内外の注目を集めることになるだろう。そのプロセスと成果は「あいりんモデル」ないしは「西成モデル」として地域課題の解決への大きなヒントと勇気を与えるものになるだろう。何よりも、これまであいりん地域や西成区に住んできた人たちの地域への愛着と誇りを涵養し、現在あいりん地域や西成区に住んでいない人々に対して「西成区に住んでみたい！」

---

2 子どもの清掃活動は、まちを舞台としたアクティブ・ラーニングとしてもその有効性が認められる。例えば、小学校に出向いて「エコピカ博士のおそうじ塾」を展開している（株）栄水化学は、子どもたちへの教育効果や子どもたちの成長ならびに社会的価値創造への寄与が認められ文部科学省「平成 29 年度青少年の体験活動推進企業表彰」において、文部科学大臣賞を受賞している。あいりん地域における子どもたちを主人公にした「トイレ清掃プロジェクト」の参考事例にもなるのではないか。

3 地域内の各公園には、それぞれ自主的に公園の管理に熱意を注いでおられる町会の方、ならびに元公園野宿者の方が居られる。2018 年夏の災害的酷暑の中でも、毎日樹木の手入れや公園内の清掃等をされている姿には本当に頭が下がる。そのような維持管理が実は地道になされているということがこの地域の「力」だと思う。子ども達と一緒にそうした方々からたくさんの学びを得たいと私自身強く感じている次第である。

という希望と期待を抱かせるものになるに違いない。

#### 4. おわりに

以上、早足になってしまったが、あいりん地域における「誰もが使える公園・広場づくり」の今後の活動と予見される成果が、西成区全体の公園・広場の利用・管理・運営ならびに居場所づくり、地域づくりにどう展開し、寄与し得るかについての考察を試みた。なおここで提起したことは、再度、公園検討会議そして「あいりん地域まちづくり会議」へと持ち帰り、市民委員さん達によってその可否について吟味検証してもらわなければならないと考えている。大阪市長、各関係行政機関部局におかれては「あいりん地域まちづくり会議」ならびに各部会、そして西成区役所主催のエリアマネジメント協議会での議論の進捗をぜひとも温かく見守り、必要な時には行政的かつ専門的知見を示唆され、各委員の誠意と熱意の下に展開されるアイデアの実現のために尽力されることを切に願う次第である。

最後に公園管理事務所と西成区役所のこの6年間の努力と熱意、そして誠意に敬意を表したい。公園・広場をめぐってこのような議論を地域内の様々な関係者で議論できるのも、両部局がこの6年間、公園で起居したり公園内で活動したりする当事者の方々と丁寧に信頼関係を結び、その信義に則り必要な活動を慎重かつ丁寧に展開されてきたが故だと感じている。そこには公園管理者や行政執行者として様々な葛藤や苦悩があったと拝察する。しかし、その葛藤や苦悩に支えられた誠意と熱意こそが地域内の様々なステークホルダーに対して一定の信頼を得ているのではないだろうか。今後も市民委員はじめ公園に集う全ての人々ならびに各関係者、各関係機関との信義に則った丁寧なやりとりを切に願う次第である。